京KYOTIAN I.D.
京のおきばりさん

取材・文／山田涼子　撮影／中島光行（Visual cafe）

建築家

長谷川渉

HASEGAWA WATARU

【プロフィール】京都生まれ。関西大学工学部建築学科卒業後、清水建築設計工房入社。'95年に一級建築士資格を取得し、'00年5月長谷川ワタル建築研究所（WHATS）設立。'03年、'04年にABC「大改造!劇的ビフォーアフター」に出演。住宅や商業建築の新築・改築を中心に手がけ、事務所1Fにてギャラリー＆カフェ「Monoff」も展開

建築設計で培ったモノづくり精神で新たな文化発信の役を担いたい

祖父も父も陶芸家というモノづくりの家に育ち、「職人＝修業」に憧れた幼少時代。中学を卒業したら大工になろうと考えていたのは、その当時、ちょうど実家が改修中だった影響からか。両親に決意を告げれば、モノづくりの奥深さを知るからこそ「家を創りたいなら、建築士」と助言を受け、建築一筋でここまで来た。大学卒業時、一日でも早く独立を果たして自分なりの家づくりをするためにも、全てが見通せる個人事務所に入ることに迷いはなかったという。やればやるほど学ぶことは多く、9年間の修業を経て、30歳を機に独立。

依頼は日常的な空間である住宅物件と、非日常的な商業施設が半分ずつ。それぞれに受けた刺激をフィードバックできるので、いまはそのバランスが心地良い。飲食店など店舗の依頼を引き受けると、「毎日来るわけじゃないからこそ、そこに楽しさや意外さ、興奮や緊張を感じられるような要素を加えつつも、毎日いるスタッフにも使いやすく、気持ちよく仕事のできる空間を」意識する。それには、日常的に人が暮らす住宅の仕事から得るものが必要不可欠だからだ。そして、問題点を改善するだけでなく、新たな可能性を提案したい。例えば「8畳のリビングを12畳にしてくれ」という要望に応えるだけなら誰にでもできること。そこで、無理してただ広げるのではなく、8畳のままでも楽しく住む方法や十分と感じられる使い方を提案したり、ときにはエディケーションもする。それが長谷川さんの基本スタイル。

そんな彼が、今夏、新たな分野に足を踏み入れた。それが、ギャラリー＆カフェの運営だ。「異業種交流会の延長というか、居酒屋でただ酒を呑むだけじゃなく、ホテルで堅苦しく集まるでもなく、それぞれの事務所を持ち回りで開放するのでもなく、多彩な才能の人たちが情報や知識を遠慮や警戒感なく交換し合える場所をつくりたくて」、サロンスペースとした事務所1階をギャラリーに。ギャラリーという業態は、一見実体がないように見え、実際現代ニーズに合った形で稼働しているケースが少ないことは覚悟の上。展示作品は、日常的に使えるものであれば、器でも写真でも、何でもあり。器なら、美術陶芸ではなく、食器や花器を。写真なら、玄関やリビングに飾ったり、友人にみせたいと思わせるものを。様々な作品を展示すれば、興味のある人が集まる。人が集まれば、情報も集まってくる。情報が増えれば知恵が生まれ、それを活かして新しい「コト」をつくり出すことも可能になる。

そうして、京都から世界へ「誇れる何か」を発信したい。そして、参加した人達のサロンとして、「いずれは、ここがあったから今がある！と言われるような場所になればいい。もちろん自分も含めて」。そんな熱い想いを胸に、本格始動も間近に迫る。その軌跡、お手並み拝見。

店内の壁やら柱やら棚やら、を好きに使って作品展示できる自由自在な空間。ご自慢は、水出しした「コーヒー」500円。仕事柄、建築関係の蔵書が多く、コーヒー1杯でじっくり読んでもらいたくてカフェ仕様に

住宅作品から「長岡京市の家」。閑静な住宅街なため、周囲との調和を意識しながらも、建築規制とのバランスをとったプランを提案。外観のボリュームを抑えるため低く見えるように工夫。木製の建具を採用し、適材適所で趣きを演出

空いている部屋にはホームステイ留学生を受け入れてもいいし、友人をもてなす空間を大切にしたいという奥様の要望を重視し、多目的な希望に対応できる仕組みを考案。来客中でも2階へ上がれるよう内玄関も設置してある

information

長谷川ワタル建築研究所
075・253・1223　http://www.whats-kyoto.com/

「Monoff」
京都市中京区御幸町通御池上ル西側
長谷川ワタル建築研究所1F
075・634・5778　13:00～17:00／月休
http://www.monoff.net
ギャラリー「今週の壁」予定
8月19日（月）～8月25日（日）　写真展「COLORS」
8月26日（月）～8月31日（日）
西村徳哉 陶展「器、ひととき」